

熊谷元直ガ室女ハ、元直討死ト聞テ、熊谷程ノ者ノ討死シタリトテ、骸ヲ孝養セザル事ヤアル、死骸ヲ取歸ラザル事、桐原細迫ガ不覺也トテ、落ル泪ノ隙ヨリ、大ニ憤ラレケルガ、夜ニ紛レ、唯一人忍デ、有田ノ戰場ヘ赴キ、元直ハ、腕ニ腫物ノ癩有シヲ標驗ニ、死人共ヲ、一々ニ探リ廻ラレケルニ、夫婦ノ契不淺シテ、頓テ元直ノ死骸ニ探リ當リ、是コソ妻ヨト云モアヘズ、抱付テ伏シ、聲ヲバカリニ泣叫バレケリ、斯テ可在非レバ、彼死體ヲ抱テ歸ン事ハ、女ノ身ナレバ、不任心責テ是ヲ形見ニトテ、腕ヲ押切テ、懷ニシテ歸ラレケルガ、命ノ限リハ、身ヲ不放持レタリ、

〔太閤記六〕勝家切腹之事

夜に入とひとしく、殿守之上にも下にも、ひろま其外櫓々などにも、酒宴初りけり、○中小谷の御かたへ、勝家さし給へば、一二酌て、又返し侍りける、○中盃もたびくめぐりければ、漸終りなんとす、勝家小谷の御かたに被申ける、御身は信長公之御妹なれば、出させ給へ、つゝ、がもおはしますまじきと有しかば、小谷御方なみだぐませ給ふて、去秋の終り、岐阜よりまいり、斯見えぬる事も前世之宿業、今更驚べきに非ず、こゝを出去ん事思ひもよらず候、まかはあれど三人之息女をば、出し侍れよ、父之菩提をも問せ、又みづからが跡をも、弔れんためぞかしと、のたまへば、いと安き御事なりとて、其よし姫君に申させ、給ふ、○中夜半の鐘聲殿守に至りしかば、御二所深聞に入ぬ、○中若狭守、文荷齋、○中勝家のおはしまし侍る五重に上り、下はかく仕廻申候御心しづかに沙汰し給へと申上しかば、さすが最期はよかりけり、男女三十餘人おなじ煙と立上りぬ、

〔陰徳太平記三十二〕杉原忠興死去附妾貞順事

忠興○杉原臨終ノ時、殊ニ哀也シハ、忠興ノ妾ノ形勢ナリ、此人ハ、伯州ノ住人、山名豊清ト云人ノ娘也、○中忠興○中彼妾ヲ近付、○中只今生ニ思置事トテハ、御身ノ名殘計也、御コト年イマダ三十三ハ、ハルカニ及ブベクモナケレバ、行末久シキ、春秋ニ富ル身也、相カマヘテ、吾ナキ跡ニ、髪下シ